

当院檀信徒の皆様

引越しや住居表示変更などで、連絡先が変わった場合は、速やかにお知らせ願います。

明王院だより

第11号

平成25年7月18日

真言宗豊山派 明王院(赤不動)
〒123-0851 足立区梅田4-15-30
TEL 03-3852-7378

感得不動明王像修復成る

一昨年三月の東日本大震災により被災した当院の本尊・感得不動明王像は約十か月間の修理を無事に終え、昨年十一月十七日に本堂にて修復開眼法要を厳修いたしました。

本尊・感得不動明王像は一昨年九月二七日より(財)美術院国宝修理所の京都国立博物館内の工房にて修理施工がなされてきましたが、約十カ月の修理を終えて昨年七月二三日に帰山されました。本尊様を宮殿に納めるにあたっては、今後の地震に備えた保安処置もあわせて実施し、翌二四日に宮殿への安置が完了しました。また、御像の修理と並行して、(株)翠雲堂の施工により内陣の床、宮殿、須弥壇の修理も行いました。東日本大震災では本尊様のご本体だけでなく、これらの環境や仏具も大きく損傷したためです。

震災では、震度五以上の激しい揺れのために本尊様は宮殿より飛び出し、台座ごと倒れ、右腕や胸などに大きく傷を負ってしまいました。本尊様にまつわる具体的な経緯は、当院に伝わる由来書の記録を除き不明でしたが、修復に伴う調査により平安時代後期の作であること、また



本尊修復開眼法要

定刻の午前十一時に大導師および職衆の僧侶が入堂、稚児による献灯献花や住職による開眼作法を経て、法要はおごそかに営まれました。法要に引き続き式典に移りました。浄財寄進者および修理施工者への感謝状贈呈、当院総代・野口節様からの挨拶、真言宗豊山派東京第二号宗務支所・鳥居幸豊僧正からの祝辞、本尊様を修理された美術院国宝修理所より所長の藤本青一様と担当技師の門脇豊様の挨拶、を経て、最後に住職が謝辞を述べました。震災後一年八カ月ほどでこつした行事を営むことができましたのはひとえに檀信徒の皆様のご協力の賜物です。改めて衷心より御礼申し上げます。(関連記事と写真を次頁にも掲載)

今後の主な予定

- 7月18日 施餓鬼会
- 9月20日~26日 秋のお彼岸
- 9月28日 護摩祈禱会
お札を申し受けます
- 1月28日 護摩祈禱会



「不動尊の面相」
額に皺がある
(当院蔵木版画)

みちしるべ

額に水波の皺あるは、六道の生を憶念するなり (弘法大師著『不動尊功能』)
お不動様の額には、水面に立つ波のような形をした皺があり、六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、の六つの世界)に輪廻する者たちを常に心配していることが確認できた。

工事ならびに修復のお知らせ

現在、(一)本堂(不動堂)の耐震補強工事、(二)如意輪観世音菩薩坐像(東京都指定文化財)保存修復、を行っております。
(一)本堂は昭和四八年竣工の、鉄筋コンクリート造の建造物ですが、東日本大震災をうけ耐震診断をおこなったところ、平成七年の阪神大震災の後に定められた現行の耐震基準を下回っていることがわかりました。慎重な検討と協議のうえ、十分な耐震性を確保するため、今回の工事を実施することと相成りました。工事期間中は、なにかとご不便をおかけしますが、何卒、ご理解ご協力のほどお願い申し上げます。施工期間 平成二五年六月二〇日~九月二〇日、施工者 株式会社水澤工務店(東京都江東区)。

(二)東京都文化財専門委員・山本勉氏(清泉女子大学教授)による調査(昨年一二月実施)により、像底および地付きのがたつきなどの構造的問題、過去の修理に起因すると思われる形状不整合などの問題が明らかとなり、このたびの保存修理の実施と相成りました。なお、本件は、平成二五年度の東京都文化財保存事業として実施しております。このため、本年度は、東京都の文化財公開事業「東京文化財ウィーク」への参加は見合わせしております。何卒、ご理解のほどよろしくお願ひ申し上げます。施工期間 平成二五年五月三十一日~平成二六年一月三十一日、施工者 公益財団法人 美術院(京都市下京区)。

つらね

▼本尊様の修復が成り、法要で開眼の行をさせていた。檀徒の仏像や位牌、また石塔の開眼は頻繁に行うがまさか本尊様の開眼を行うとは思っていません。▼仏像が造られたときだけでなく、修復されたときにも開眼を行う。本尊様にとって今回は何度目の開眼だったのだろうか。▼開眼という言葉、スポーツニュース等でも案外目にするものである(この場合は「かがん」と読むという説もあるが)。「中田翔打撃開眼」といった具合に。こちらの開眼はもちろん仏像に魂を入れるという意味でなく、なにか物事の奥義がコツをささるという意味のようだ。▼本尊様の修復を通じて、「開眼」というレベルには全くほど遠いが、これまで認識や知識が足りなかったことをいろいろと学ばされたように思う。防災のこと、仏像修理のこと、etc...。むしろ、本尊様が、住職としての私の眼を開いて下さったのかもしれないと思う。

本尊修復開眼法要特集



進列する職衆の僧侶



大導師 鳥居愼譽猥下ご入堂



献灯献花の稚児



開眼作法の巖修



表白を讀上げられる大導師



感謝状贈呈(総代 野口節様)



真言宗豊山派東京二号支所長 鳥居幸譽僧正



美術院国宝修理所長 藤本青一様



美術院国宝修理所 門脇豊様

今回、皆様には物心両面のお力添えをいただいたことで、本尊様は健全で立派なお姿を取り戻しただけでなく、皆様からのお力が反映して身も心も養われ、そのご威光がいっそう増したのではないかと思っております。私は、この靈驗あらたかな本尊様にお仕えるには、全くの未熟者ではありますが、精進を重ねまして、皆様にご利益を取り次ぐお役に少しでも立てればと思ふ次第です。そして、本日ここにご参集の方々はじめめとして今回の修復事業に関わられた皆様方が、この修復事業を通じて結ばれたご縁をよりいっそう強くされ、ご一家一同様ともども、ご健勝にて過ごされますよう祈念申し上げます。このお堂では正月五月九月の二十八日にはご本尊様のお姿を仰ぎつつ護摩祈禱会を修行しております。ぜひお参りいただければと存じます。そして、東日本震災の物故者の冥福と被災地の復興を祈念しまして、謝辞を終えさせていただきます。ありがとうございました。(平成二四年一月一七日 本堂にて)

昨年三月のあの東日本震災の最初の大きな揺れがあったとき、私は外出しておりました。あわてて寺に帰ってきたところ、この本堂の正面の扉が、開いているはずの扉が、いままでも全く見ても無いような不自然な閉まり方をしておりました。本堂のなかで何かとんでもない事態が起きているような予感がしまして、あわてて、堂内に駆け込んだところ、すぐ本尊様が倒れている光景が目に見えられました。それは言葉では言い表せないほどたいへん衝撃的で痛々しい光景でありましたが、とにかくこのままではいけないということで、何とか救い出さなければいけないということで、夢中で、倒れている本尊様を宮殿から出して、隣の回向堂のほうに運びました。救い出そうとしていた最中に、実は二回目の大きな揺れがあったのですが、無我夢中だったのでほとんど気になりませんでした。回向堂で、傷ついた本尊様を寝かせたあとしばらくして、少し冷静さをとりもどしてお姿を見ますと、剣もっている右腕は肘から先がはずれ、手首もとれ、剣の刃の部分も外れてと、大怪我をしているのに、左腕のほうは、けんきくという綱をしっかりと握り締めたままであることに気づきました。お不動様の剣は魔を払うためのものであり、左手の綱は衆生を正しく導くためのものであります。ひょっとすると、本尊様は、われわれを、このお寺を、檀家さんを、信者さんを救おうと、これら全てにふりかかる魔を払うため自分の身を投げ出したのではないかとということに、はっと気づきまして、非常に厳肅な気持ちになりました。実際、この寺でおまつりする仏像が被災にあったのは本尊様だけではありません。仏像というのは、言葉は口にならなくても形や姿で教えを示すといわれるのですけれど、こちらの本尊様の場合は、さらに具体的な行動をもって、自分の身を投げ出してまで有縁の人々を救おうという行動でもって、教えを示されたのだと思ひ、たいへんな靈驗をいただいた気がいたしました。

本日の本尊感得不動明王修復開眼法要にあたり、ひとこと謝辞を申し上げます。経過報告で述べましたとおり、このたびの本尊修復事業は昨年三月の東日本震災がきっかけとなったもので、出発点は、まったく思いもよらぬことではありましたが、事業に着手以降は大きなトラブルもなく進めることができ、本日の法要に至りました。本尊、諸仏のご加護はもとより、歴代先師の遺徳、檀信徒の皆様方のご協賛、そしてこの事業に関わられた関係各位のご尽力の賜であります。改めて、厚く御礼申し上げます。本日の法要に際しては、前の真言宗豊山派管長、総本山長谷寺住持・眞性寺御山主・鳥居愼譽猥下を大導師に仰ぎ、真言宗豊山派東京二号支所長・鳥居幸譽僧正からご祝辞をいただいたのをはじめ、施餓鬼組合寺院の諸大徳に御助法賜り、また関係寺院の諸大徳にご来駕賜りましたこと、誠に感謝に耐えられません。そして、いろいろと困難な条件もあるなか立派な修復を成し遂げて下さった、美術院様、翠雲堂様にも改めて感謝を捧げます。ただいま貴重なお言葉を賜りました、藤本青一様、門脇豊様には修理に先立つ調査の段階から御像を納めていただくところまで終始一貫お世話になりましたことをここで申し添えます。ありがとうございました。ここで、今回の修復事業のきっかけとなった昨年三月十一日の出来事をふりかえって少しお話ししたいと思います。

謝辞
住職 松崎隆一